



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

10. 緑枝接ぎ法によるブドウ苗木の安定生産

[要約]

緑枝接ぎによるブドウ苗木の育成方法は、接ぎ木後の活着が良く、枯死が少ないため、慣行の接ぎ挿し法と比べて成苗率が高い。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

ブドウの苗木生産は、慣行では台木品種の休眠枝と穂木品種の休眠枝を接ぎ挿して（接ぎ挿し法）生産されているが、接ぎ木部の癒合不良や発根不良により、他の果樹苗木と比べて成苗率が低い。このため、急増する「シャインマスカット」や醸造用品種などの苗木の需要に対して、十分な供給ができていない。そこで、慣行の接ぎ挿し法と比べて成苗率の高いブドウ苗木の育成方法を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 緑枝接ぎ法では3月中旬に、台木の休眠枝をセルトレイ（固化培地）に挿し木し、十分な培地温度を確保するために発根するまでは、施設内で育成する（図1）。
2. 4月下旬から5月上旬に、発根した台木を苗圃に移植し、新梢を伸長させる（図1）。
3. 6月中下旬に、台木の新梢部分にくさび形に切削した穂木品種の緑枝を割り接ぎする（図1）。
4. 接ぎ木後は、台木から発生する副梢をこまめに切除し、穂木部分の新梢成長を促す。
5. 台木品種に「ハイブリッド・フラン」を用いて「シャインマスカット」の苗木を育成する場合、緑枝接ぎ法では、慣行の接ぎ挿し法と比べて、苗径は同等であるが、根量は明らかに多く、成苗率は明らかに高い（表1、図2）。
6. 緑枝接ぎ法では接ぎ挿し法と比べて、苗圃に定植する時期が約1か月早いことや、接ぎ挿し法では、畝を崩す必要があるため、マルチを敷設できないのに対して、緑枝接ぎ法ではマルチ敷設による保水効果により、根量が多くなると考えられる（図1、図2、表1）。
7. 接ぎ挿し法では苗圃定植後のカサの癒合不良による枯死及び生育不良が多いため、成苗率は約60%と低い。一方、緑枝接ぎ法では、接ぎ木後の活着及び生育が良好なため、成苗率は90%台後半で、接ぎ木した個体がおおむね成苗となる（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 接ぎ木は、台木の新梢の硬くなりきっていない位置で実施するとよい。
2. 緑枝接ぎ法では、接ぎ木時期の6月中下旬に作業が集中する。
3. 緑枝接ぎ法により育成した苗木では、慣行の接ぎ挿し法で育成した苗木より、接ぎ木位置が高くなるため、苗木定植後の切り戻しの際には注意する（図2）。



[具体的データ]



図1 緑枝接ぎ法及び接ぎ挿し法（慣行）によるブドウ苗木の生産方法及び行程

表1 「シャインマスカット」の苗木生産における育成方法の違いが苗径、根量及び成苗率に及ぼす影響

区	苗径 ^z (mm)	根量 ^y (g)	成苗率 (%)
緑枝接ぎ法	8.0	88.2	97.5
接ぎ挿し法（慣行）	8.3	32.1	63.3

^z穂木の新梢基部から10cmの位置の直径

^y根の生重量

^x苗径及び根量はt検定、成苗率は χ^2 検定により、**は1%水準で有意差あり、nsは5%水準で有意差なし

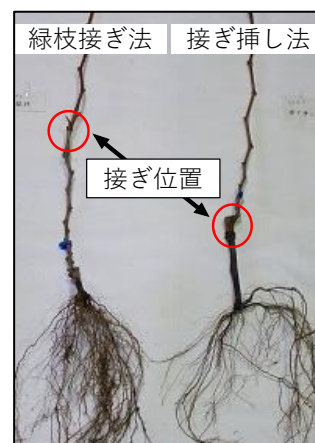


図2 育成した苗木の形態

[その他]

研究課題名：果樹等の幼木期における安定生産技術の開発

予算区分・研究期間：受託（農林水産研究推進事業（委託プロ））・令2～6年度

研究担当者：渡辺真帆、中島讓、安井淑彦、中津有紀子、藤井雄一郎